

霧島山（新燃岳）の火山活動解説資料

福岡管区気象台

地域火山監視・警報センター

鹿児島地方気象台

＜噴火警戒レベルを3（入山規制）から2（火口周辺規制）に引下げ＞

新燃岳では、9月8日以降噴火は観測されていません。火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、9月以降やや少ない状態で経過しており、新燃岳周辺の傾斜計でも新燃岳の地下の膨張を示すような特段の変化は認められません。またGNSS連続観測では、2025年3月頃から認められていた、霧島山深部の膨張を示すと考えられる基線のわずかな伸びは、7月上旬頃からは停滞しています。火山活動に低下傾向が認められていることから、新燃岳火口から2kmを超える範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性は低くなったと判断し、本日（10月17日）11時00分に噴火警戒レベルを3（入山規制）から2（火口周辺規制）に引き下げました。

一方、新燃岳では火口直下を震源とする火山性地震が多い状態で経過しており、引き続き、弾道を描いて飛散する大きな噴石が新燃岳火口から概ね2kmまで、火砕流が概ね1kmまで達する噴火が発生する可能性があります。

【防災上の警戒事項等】

弾道を描いて飛散する大きな噴石が新燃岳火口から概ね2kmまで、火砕流が概ね1kmまで達する可能性があります。そのため、新燃岳火口から概ね2kmの範囲（図1）では警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

○ 活動概況（図1～5）

新燃岳では6月下旬に火口直下を震源とする火山性地震が急増する中で噴火が発生し、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量が急増しました。7月上旬頃からは噴火活動の活発化とともに継続時間の長い火山性微動が断続的に発生しましたが、8月中旬頃からは噴火の発生間隔が長くなり、火山性微動の発生頻度が低下しました。

9月上旬頃からは火山ガス（二酸化硫黄）の放出量はやや少ない状態で経過しています。9月8日以降噴火は観測されておらず、新燃岳周辺の傾斜計でも新燃岳の地下の膨張を示すような特段の変化は認められません。一方、火口直下を震源とする火山性地震は9月頃から減少していますが、引き続き多い状態で経過しています。

GNSS連続観測では、霧島山を挟む一部の基線で、2025年3月頃から霧島山深部の膨張を示すと考えられるわずかな伸びが認められていましたが、7月上旬頃からは停滞しています。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/now/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、東京大学、九州大学、鹿児島大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、宮崎県及び鹿児島県のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

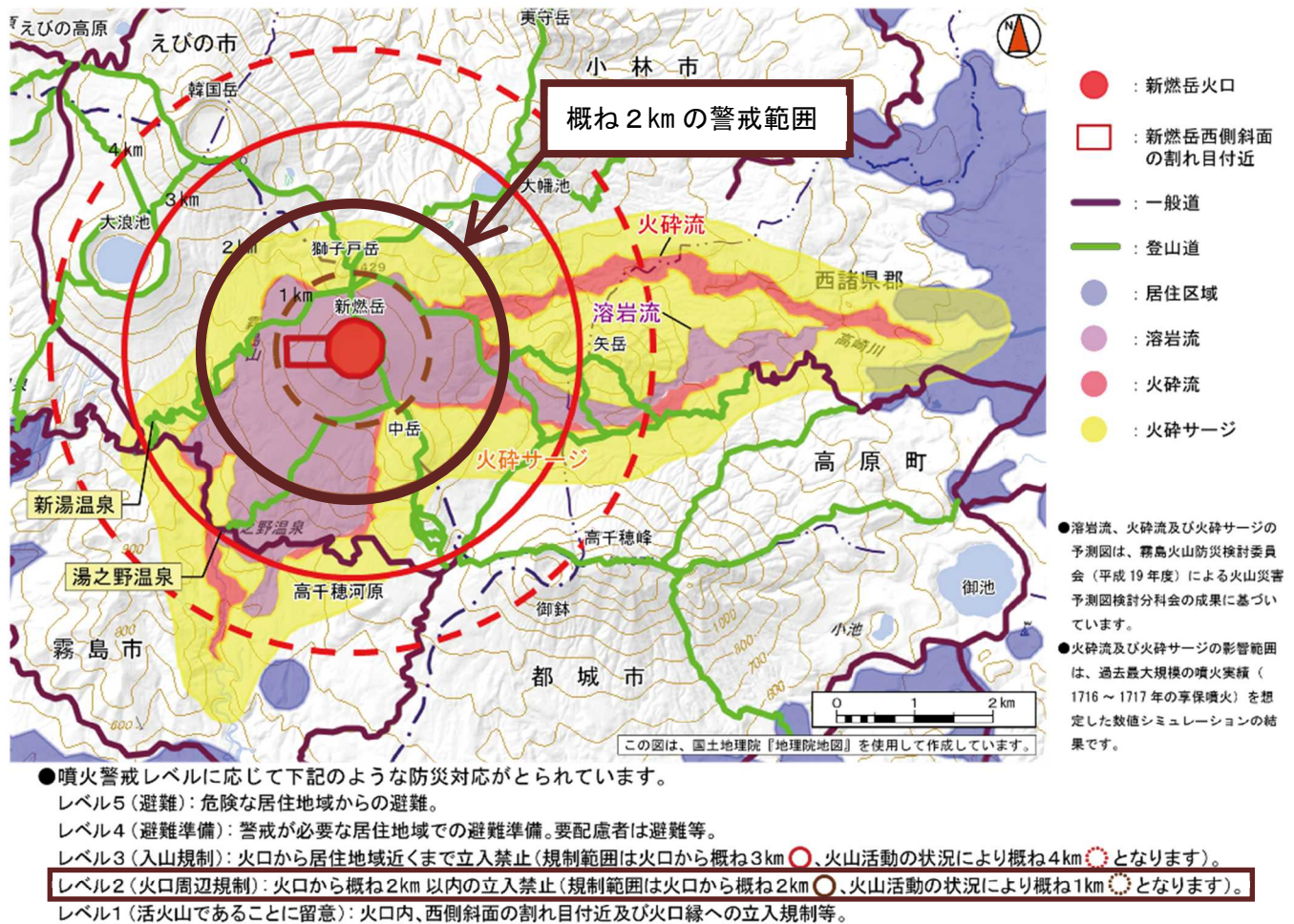


図1 霧島山（新燃岳） 警戒が必要な範囲

弾道を描いて飛散する大きな噴石が新燃岳火口から概ね2kmまで、火砕流が概ね1kmまで達する可能性があります。そのため、新燃岳火口から概ね2kmの範囲では警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

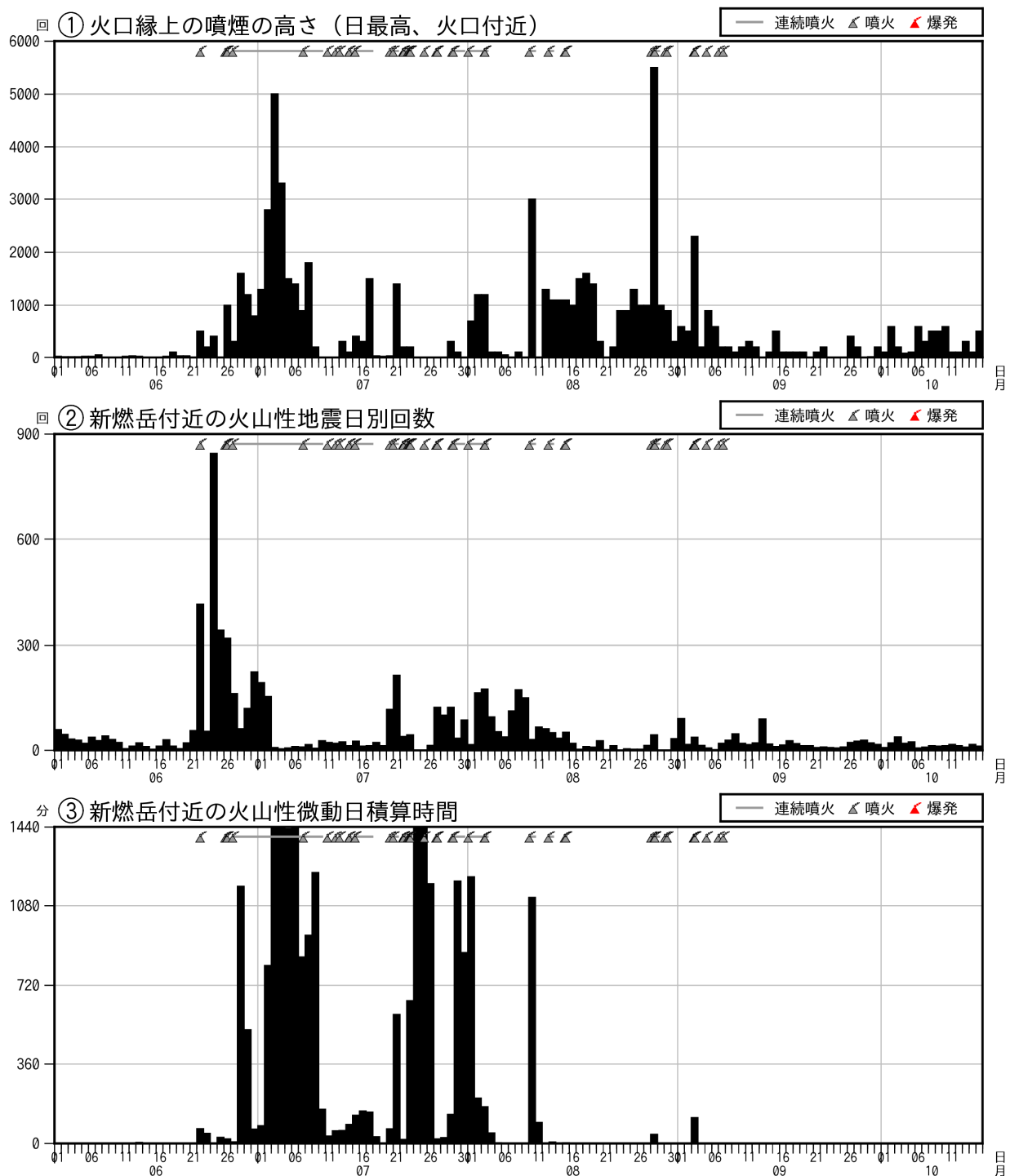


図 2 霧島山（新燃岳） 火口縁上の噴煙の高さ（上段）、火山性地震の日別回数（中段）及び火山性微動の日積算時間（下段）（2025 年 6 月 1 日～10 月 15 日）

- ・新燃岳では、6 月下旬に火口直下を震源とする火山性地震が急増する中で噴火が発生し、以降、断続的な噴火活動がみられました。7 月上旬頃からは噴火活動の活発化とともに継続時間の長い火山性微動が断続的に発生しました。
- ・8 月中旬頃からは噴火の発生間隔が長くなり、火山性微動の発生頻度が低下しました。9 月 8 日以降噴火は観測されていません。
- ・火口直下を震源とする火山性地震は 9 月頃から減少していますが、引き続き多い状態で経過しています。

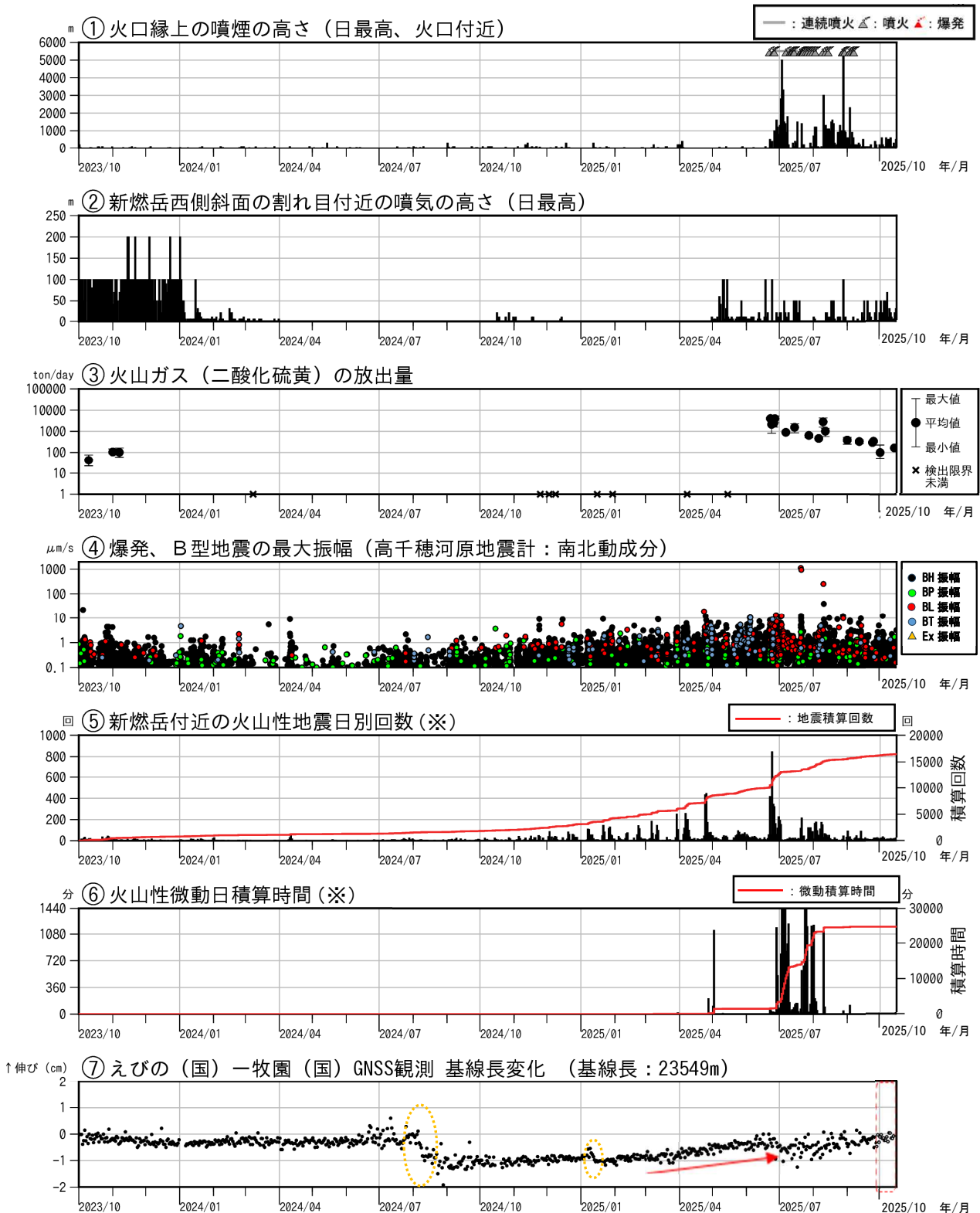


図3（前ページ） 霧島山（新燃岳） 火山活動経過図（2023年10月～2025年10月15日（速報値））

- ・新燃岳では、6月下旬に噴火が発生し、以降、断続的な噴火活動がみられました。8月下旬には噴煙が最高で火口縁上5,500mまで上がりました。その後、噴火活動は低下しており、9月8日以降噴火は観測されていません。
- ・火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、6月下旬に急増して多い状態となりましたが、9月以降やや少ない状態で経過しています。
- ・火口直下を震源とする火山性地震は6月下旬に急増しました。7月上旬頃からは噴火活動の活発化とともに継続時間の長い火山性微動が断続的に発生しましたが、8月中旬頃からはその発生頻度が低下しています。火口直下を震源とする火山性地震は9月頃から減少していますが、引き続き多い状態で経過しています。
- ・GNSS 連続観測では、霧島山を挟む一部の基線で、2025年3月頃から霧島山深部の膨張を示すと考えられるわずかな伸びが認められていましたが（赤矢印）、7月上旬頃からは停滞しています。

⑦の基線は図6の基線⑦に対応しています。

⑦の基線の直近の9月下旬以降のデータ（赤破線内）は速報的な解析結果であり、再解析により修正されることがあります。

⑦の橙色破線内の変化は、日向灘の地震（2024年8月8日、2025年1月13日）による変動です。

※新燃岳南西観測点の機器障害により、新燃西（震）観測点、霧島南（震）観測点及び高千穂河原観測点で計数している期間があります。

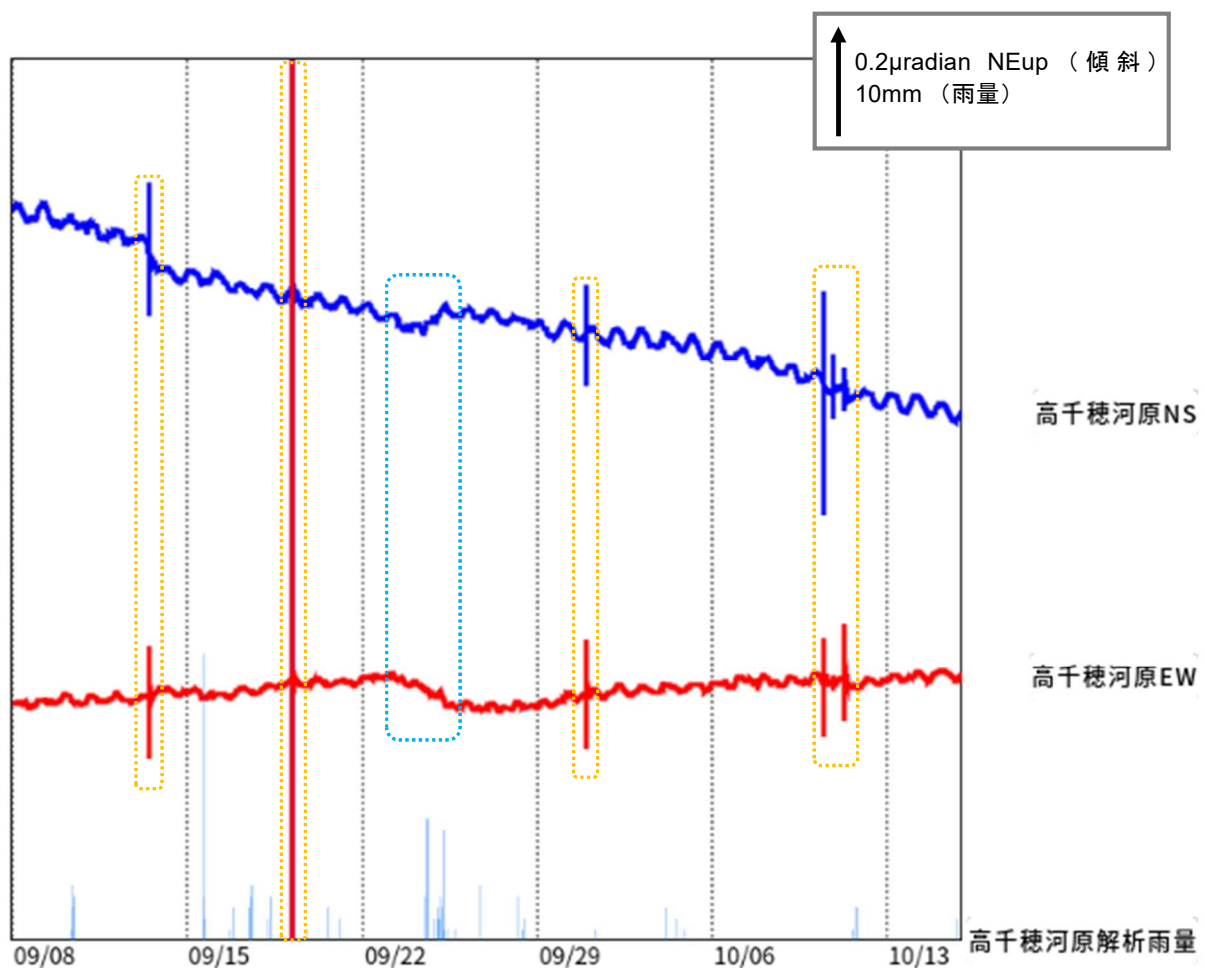


図4 霧島山（新燃岳） 傾斜計による地殻変動の状況（分値）（2025年9月8日～10月15日）

新燃岳周辺の傾斜計では、新燃岳の地下の膨張を示すような特段の変化は認められていません。

橙色破線内の変化は遠地震による変動です。

青色破線内の変化は降水の影響によると考えられます。

各観測点のデータは潮汐補正済みです。

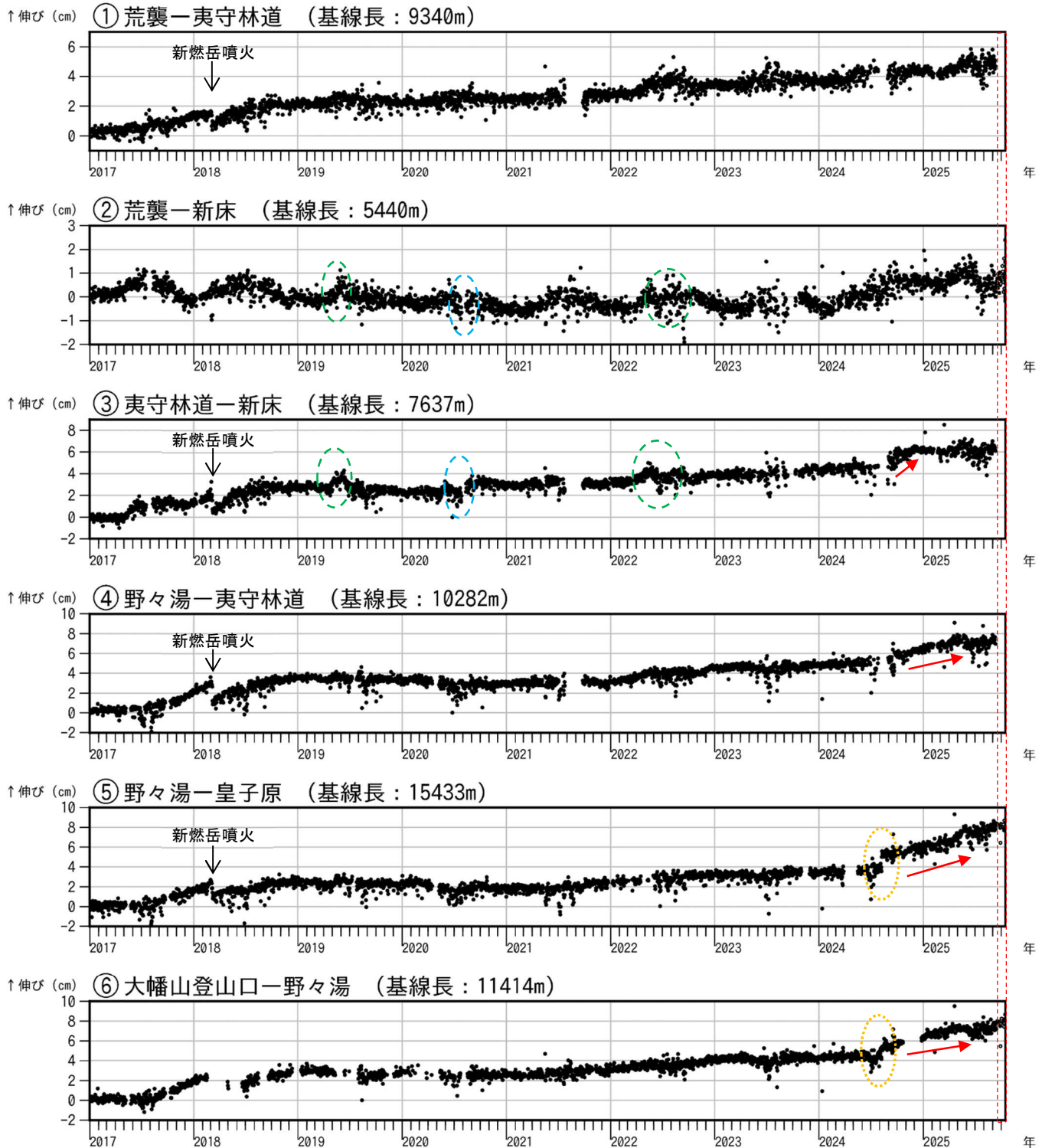


図5 霧島山（新燃岳） GNSS 連続観測による基線長変化（2017年1月～2025年10月15日）

GNSS 連続観測では、2024年11月頃から、霧島山を挟む一部の基線で新燃岳付近の地下の膨張を示すと考えられるわずかな伸びが認められましたが（赤矢印）、7月上旬頃から停滞しています。

これらの基線は図6の①～⑥に対応しています。

直近の9月下旬以降のデータ（赤破線内）は速報的な解析結果であり、再解析により修正されることがあります。

基線の空白部分は欠測を示しています。

緑色破線内の変化は、新床観測点周囲の環境の変化に伴う影響と考えられます。

水色破線内の変化は、新床観測点のセンサー台交換による局所的な変動による影響と考えられます。

橙色破線内の変化は、2024年8月8日の日向灘の地震による変動です。

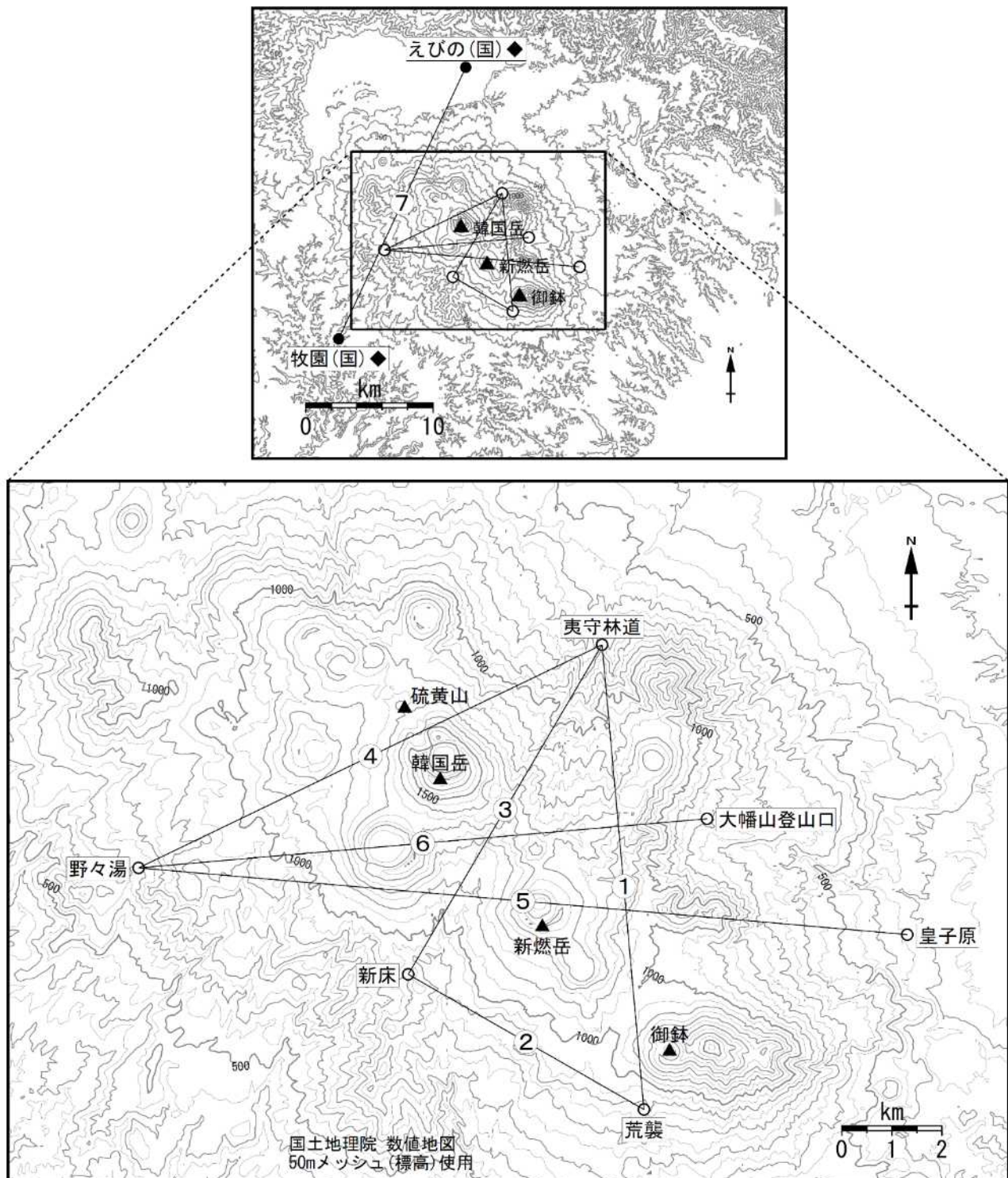


図6 霧島山（新燃岳） GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
（国）：国土地理院

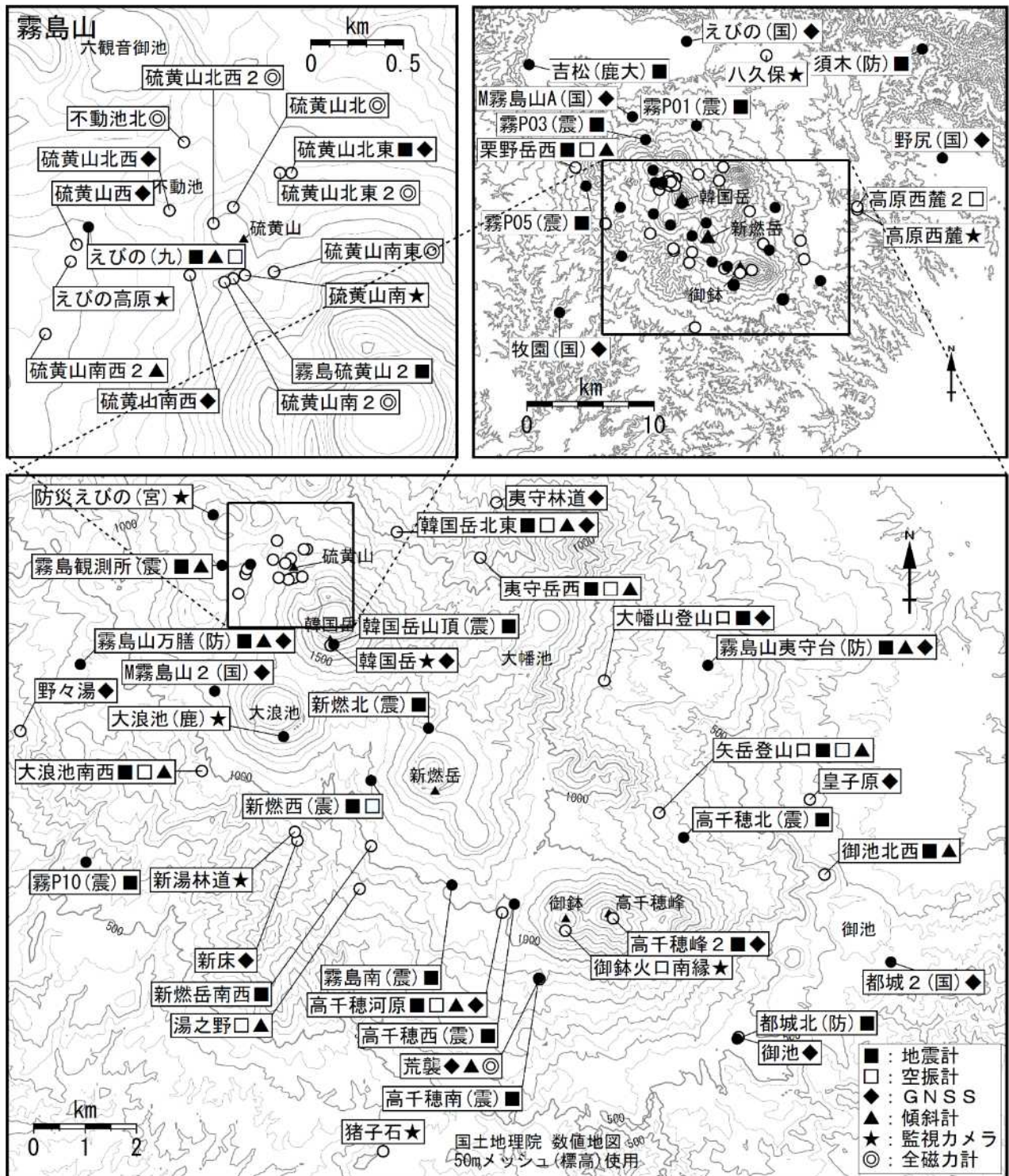


図7 霧島山 観測点配置図

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
（国）：国土地理院、（震）：東京大学地震研究所、（九）：九州大学、（鹿大）：鹿児島大学、
（防）：防災科学技術研究所、（宮）：宮崎県、（鹿）：鹿児島県